

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 28 日現在

機関番号：14403

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K14066

研究課題名（和文）知的障害児の自己決定に関わる学習支援システムの構築

研究課題名（英文）Construction of a learning support system for self-determination of children with intellectual disabilities

研究代表者

今枝 史雄（IMAEDA, FUMIO）

大阪教育大学・教育学部・講師

研究者番号：70824118

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、知的障害者の自己決定の実態に関する調査を基に、自己決定に関わる学習プログラムの作成および有効性の検証を行うことを目的とした。

知的障害者114名に自己決定の実態を調査した結果、「外食先のメニュー」などと比較し、「生活する場所」などの契約行為に関する自己決定は有意に少なかった。次に、地理（お茶の種類）と日常生活（昼食の選び方）を題材とした学習プログラムを作成し、知的障害者延べ65名に実施した。知的障害者の学習特性を踏まえ、ベン図を用いた選択肢の特徴の視覚化を試みたが、達成率にバラつきが見られた。今後は選択肢の特徴を理解につながる支援ツールの改良とともに、学齢期で活用することが望まれる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

2003(平成15)年の支援費制度導入以降、知的障害者支援の近年のキーワードとして自己決定支援が挙げられている。しかし、わが国では自己決定という概念が近年になり重要視されたことも関係し、「自己決定に関わる能力」、特に問題解決能力の形成に向けた学習方法とその支援方法に関する実証的研究は、知的障害者に対して、まだほとんど行われていないことが課題とされている。本研究では成人期ではあるものの、知的障害者の自己決定の実態と自己決定に関わる能力を形成する学習プログラムを作成したことで、知的障害者の自己決定支援の提言につながったと言える。今後、支援ツールを改良することで、学齢期の実施にもつながると言える。

研究成果の概要（英文）：This study was investigated the actual conditions of self-determination of people with intellectual disabilities in Japan, created and verified learning program for the formation of problem-solving skills related to self-determination. A survey of 114 people with intellectual disabilities on their self-determination revealed that they had significantly fewer opportunities for self-determination regarding contractual acts such as “where to live” compared to “menus of places to eat out”. Next, we created a learning program based on geography (types of tea) and daily life (how to choose lunch). The created learning program was implemented to a total of 65 people with intellectual disabilities. Based on the learning characteristics of the intellectually disabled, we attempted to visualize the characteristics of the choices using a Venn diagram, but the achievement rate varied. In the future, it is desirable to improve the support tools, as well as to utilize them at school age.

研究分野：特別支援教育

キーワード：知的障害 自己決定 学習支援 システム構築

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

・研究開始当初の背景

2003(平成15)年の支援費制度導入以降、知的障害者支援の近年のキーワードとして自己決定支援が挙げられている(與那嶺,2010)。わが国でも、2017(平成29)年に厚生労働省が「障害福祉サービス等の提供に係る意思決定支援ガイドライン」(以下、ガイドライン)を発表した。ガイドラインでは、意思決定に関わって「決定を行う場面」「人的・物理的環境による影響」「本人の判断能力」が重要とされている。「決定を行う場面」は、「日常生活場面」と「社会生活場面」に分かれており、「日常生活場面」は遊びに行く場所、友人、衣服の選択等、日常生活の多岐にわたり、「社会生活場面」は職業、住まいの場の選択等の契約行為に関わるものが含まれている。なかでも、職業選択は、知的障害児の民間企業への一般就労率や、就労系障害福祉サービスの利用が年々増加していることから(厚生労働省,2019)、知的障害特別支援学校高等部の進路指導のさらなる充実が挙げられている。また、住まいの場の選択も、障害者自立支援法(現障害者総合支援法)制定以降、障害者の地域移行が掲げられ、共同生活援助(グループホーム)の利用率も年々増加している(厚生労働省,2015)。よって、知的障害児・者が職業選択や住まいの場を選択する機会は以前より増加していることが伺える。「本人の判断能力」については、Wehmeyer, Kelchner & Richards(1996)、Miller, Doughy & Krockover (2015)等は自己決定には、状況の把握、選択肢の理解等の問題解決能力が関係するとしている。よって、知的障害者が「日常生活場面」「社会生活場面」において、適切な自己決定を行うためには、問題解決能力の形成が必要であると言える。しかし、わが国では自己決定という概念が近年になり重要視されたことも関係し、「自己決定に関わる能力」、特に問題解決能力の形成に向けた学習方法とその支援方法に関する実証的研究は、知的障害者に対して、まだほとんど行われていないことが課題とされている(手島,2003;與那嶺・岡田・白澤,2010)。

・研究の目的

本研究(「知的障害児の自己決定に関わる学習支援システムの構築」)は知的障害者の自己決定の実態に関する調査を基に、自己決定に関わる問題解決能力の形成に向けた学習プログラムの作成および有効性の検証を行い、知的障害者の自己決定に関わる問題解決能力の形成に向けた学習支援システムの構築を行うことを目的とした。研究1(知的障害者の自己決定の実態に関する調査研究)では、成人期知的障害者114名を対象にアンケート調査の実施し、成人期知的障害者の日常生活上の自己決定の実態を明らかにした。研究2(知的障害者の自己決定に関わる学習プログラムの作成)では、オンデマンド型動画の作成、自己決定に関する能力の育成を目的とした学習講座を作成した。研究3(知的障害児の自己決定に関わる学習プログラムの有効性の検証)では、成人期知的障害者の生涯学習支援の取組であるオープンカレッジ東京で、知的障害者を対象に研究2で作成した学習講座を実施し、その有効性を検証した。

なお、研究当初は特別支援学校高等部の知的障害児を対象に知的障害児の自己決定に関わる学習支援システムの構築を目的としていたが、新型コロナウイルス感染症の影響により、特別支援学校を対象とした研究が困難となったため、成人期知的障害者を対象とした研究とした。

・研究の方法

研究1：知的障害者の自己決定の実態に関する調査研究

1.対象:成人期知的障害者114名であった。対象者は特例子会社、または障害福祉サービス事業所に勤務していた。平均生活年齢は29.8歳(±8.3,range:18-51)、平均精神年齢は7:11(±1:09,range:4:05-13:00)であった。

2.調査項目:The Arc's Self-Determination Scale (Wehmeyer,1995)などを参考に、11項目を作成した。回答は「いつも自分で決めてきた」、「だいたい自分が決めてきた」、「あまり自分で決めなかった」、「他の人に決めてもらい、自分では決めなかった」、「今まで自分で決める機会がなかった」の5件法で問うた。

3.調査方法:回答する対象者の傍に支援者(事業所職員等)を配置し、必要に応じて調査項目や5件法の文言を読み上げるなどの支援を行った。

4.手続き:5件法について、～を合わせて、「自分で決めた経験がある(以下、経験あり)」とし、「他の人に決めてもらい、自分では決めなかった(以下、他人が決めた)」、「今まで自分で決める機会がなかった(以下、経験なし)」の3種とした。それぞれの項目について、3種の割合の算出後、実数を用いて²検定を実施した。

5.倫理的配慮:研究倫理規定に従い、対象者とその支援者に対して、書面にてプライバシー保護について説明し、同意を得た場合のみ、調査を実施した。

研究2：知的障害者の自己決定に関わる学習プログラムの作成

1.オンデマンド型動画の作成

(1)動画作成協力者:特別支援学校に10年以上勤務経験のある4名であった。

(2)動画の内容:2つの動画を作成した。題材は、動画1は「自己決定の大切さ」、動画2は自己決定のプロセスとして「要素の抽出、要素の整理を知ろう」であった。自己決定のプロセスについては今枝ら(2020)等を参考にした。動画1は8分13秒、動画2は7分49秒であった。

2.学習講座の作成

(1)講座作成協力者:特別支援学校に5年以上勤務経験のある4名であった。

(2)学習講座内容の選定:成人期知的障害者の生涯学習支援の取組であるオープンカレッジ東

京で実施することを踏まえ、以前実施した社会科(地理)講座と日常生活講座の2講座に、自己決定に関わる「選択肢(対象物)の特徴の理解」「選択肢の選択」の2つの活動を取り入れることとした。

研究3：知的障害者の自己決定に関わる学習プログラムの有効性の検証

1. オンデマンド型動画の公開・検証

(1) 動画の公開方法：動画はYouTubeにアップロードし、開設した専用のホームページ上で公開した。成人期知的障害者の60名にホームページ閲覧用のパスワードを郵送で配布し、動画を視聴、アンケートを回答してもらうよう依頼した。

(2) アンケートの項目：共通質問項目として、動画を用いた学習に関する質問を5項目問うた。5項目は 動画の再生環境、動画の再生方法、動画再生時のトラブルの有無、動画を見ての感想、対面講座と動画による講座の受講希望であった。動画ごとの質問として、動画1は内容のわかりやすさ、自己決定することの大切さの理解、動画の時間、動画の説明スピード、動画の良いところ(自由記述)、動画の不明点(自由記述)の6項目、動画2は内容のわかりやすさ、要素の抽出の理解、要素の整理の理解、動画の時間、動画の説明スピード、動画の良いところ(自由記述)、動画の不明点(自由記述)の7項目であった。それぞれ「とてもわかりやすい」などの選択肢を有していた。

(3) 分析：項目ごとに、項目に含まれる選択肢ごとの人数を算出した。

(4) 倫理的配慮：アンケート視聴前に研究倫理規定に従い、対象者に対してプライバシー保護について説明した。

2. 学習講座の実施

(1) 地理講座の実施

1) 対象者：成人期知的障害者33名であった。

2) 講座の目的と展開：講座目的は 食べ物を通して地域の違いについて学ぶ、資料を整理・比較し対象物の特徴を整理する、学んだことを活用して特徴を図に表す、とした。講座展開は下記の通りである。

講師による講義：世界のお茶の種類や生産地の他、「ほうじ茶」「白茶」「プーアル茶」の特徴と地理的要素を学んだ。

目指せお茶マイスター：お茶について説明できるようになることを目標に、以下の4プロセスを設定した。

-1) 要素の抽出：講義内容をまとめた資料から、それぞれのお茶の特徴を表す言葉(要素)を抜き出し、付箋に書いてシートに貼る活動を行った。

-2) 要素の整理：抽出した要素を、共通点を意識してマトリックス表(資料)に並べた。

-3) 観点の命名：整理した要素ごとに名前(観点)を考え、要請に応じてヒントカードを配布した。

-4) 定義の図式化：「お茶を構成する要素を図式化する=構成図を作る」とし、「ほうじ茶」の構成図を作成した(資料)。次に、「ほうじ茶の構成図で、プーアル茶、白茶の関係を表す」と課題を設定し、「プーアル茶」を例示し、「白茶」については対象者個人で取り組んだ。要請に応じてヒントカードを配布した。その後、新たに「緑茶」「紅茶」の資料を提示し、「構成図の中で緑茶、紅茶の関係を表す」と課題を提示した。ここでも「緑茶」を例示とし、「紅茶」は対象者個人で取り組んだ(資料)。

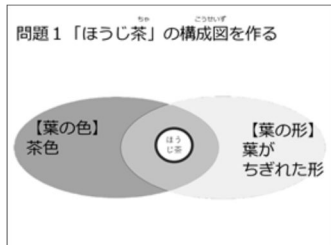
3. 分析：4プロセスについて対象者の達成率を算出した。「要素の抽出」は対象物ごとに達成率を算出した。達成水準は 支援なしで自ら遂行した「達成」、ヒントもしくはモデルを提示した「ヒント・モデル提示」、ヒント・モデル提示に支援者の声掛けが必要だった「一対一援助」、支援者が答えを提示した「答えの提示」の4水準とした。

4. 倫理的配慮：本研究における大阪教育大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。課題は、対象者に対し、参加・協力の同意および学会発表の承諾を得た上で実施した。

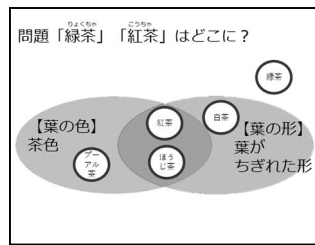
【世界のお茶特徴整理シート】
①要素の整理と観点の命名マトリックス

観点	ほうじ茶	プーアル茶	白茶
発酵	不発酵	後発酵	弱発酵
葉の色	茶色	茶色	うすく白っぽい
葉の形	葉がちぎれた形	曲がった形	葉がちぎれた形
お茶の色	お茶は茶色	お茶は茶色	お茶は琥珀色

資料



資料



資料

(2) 日常生活講座の実施

1) 対象者: 成人期知的障害者 32 名であった。

2) 講座展開:

事前アンケートの説明: 昼食をどこで何を食べているのか、何を大事にして選んでいるのかを共有した。

講義 1: 講師より、食事の必要性、食事をどのように手に入れるかについて説明した。

展開 1 (観点の確認・整理): 講師の話を踏まえて、昼食の決め方の 4 つの観点(値段・満腹感・味・提供時間)について学び、具体的な事例(かつ丼、たぬきうどん等)を提示して特徴を表に整理した。

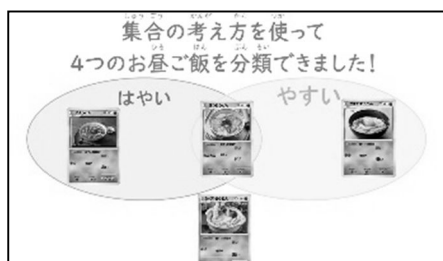
- 1) 展開 2 - 1 (具体的な昼食内容の整理): メニューの特徴が書かれた特徴カード(たぬきうどん、ざるうどん、かつ丼、おにぎり)を「あたたかさ」と「主食(麺 or ご飯)」の集合が書かれた構成図シートに置き、それぞれのメニューの特徴を把握した。

- 2) 展開 2 - 2 (具体的な昼食内容の整理): メニューの特徴が書かれた特徴カード(きつねうどん、肉うどん、釜玉うどん、なべ焼きうどん)を「はやい(提供時間)」と「やすい(値段)」の集合が書かれた構成図シートに置き、それぞれのメニューの特徴を把握した。ここでは受講者個人で取組んだ(資料)。

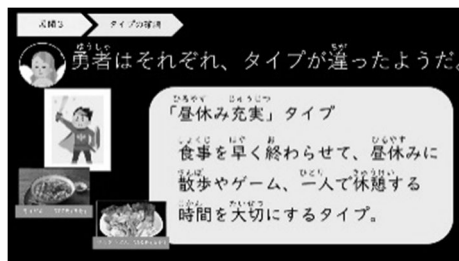
展開 3 (設定された条件下での昼食の選択): 「予算: 1000 円」「時間: 30 分」の条件を提示し、メニュー 6 種類(きつねうどん、肉うどん、釜玉うどんに加え、おろしぶっかけうどん、サラダうどん、コロッケうどん)から選んだ。これまでの展開と同じように特徴カードを用いた。その際の観点を「はやい(提供時間)」と「やすい(値段)」とし、集合を使ったメニューの特徴を全体に提示した。その後、昼食選択後の残金や残り時間の理解を深めて、選択の理由記述の例示として、3 つのタイプ(昼休み充実タイプ、食事内容を大切にタイプ、バランスタイプ)を提示した(資料)。3 つのタイプはメニューと対応しており、「昼休み充実タイプ(提供時間が早い、休み時間が長い)」はきつねうどん、サラダうどん、「食事内容を大切にタイプ(提供時間が長く、休み時間は短い)」はコロッケうどん、釜玉うどん、「バランスタイプ」は肉うどん、おろしぶっかけうどんであった。受講者自身が希望するメニューを選択し、タイプを参考にしながら選択理由を記述した。

3) 分析: 展開 2 - 2 および展開 3 の対象者の達成率を算出した。達成水準として、自ら遂行できた「達成」、ヒント、またはモデルを提示した「ヒント・モデル提示」、支援者の言葉かけが必要だった「一対一援助」、支援者が答えを提示した「答えの提示」とした。

4. 倫理的配慮: 本研究における大阪教育大学倫理審査委員会の承認を得て実施した。課題は、対象者に対し、参加・協力の同意および学会発表の承諾を得た上で実施した。



資料



資料

研究成果

研究 1: 知的障害者の自己決定の実態に関わる調査研究

項目ごとに「経験あり」「他人が決めた」「経験なし」のそれぞれの割合を算出した。「買い物に行く場所」「外食先でのメニュー」などの選択は「経験あり」の割合が 75% を超えていた。² 検定を実施したところ、有意な差が見られた($\chi^2(20) = 245.40, p < .01$)。残差分析の結果、「生活する場所」「治療を受ける病院」「契約する携帯電話」を「経験あり」と選択した割合が 1% 水準で有意に低いことが明らかになった。

障害福祉サービス事業所の知的障害者 693 名分を対象に自己決定の実態を分析した與那嶺ら(2009)は「医療的処置に関する自己決定」は「日常生活活動における自己決定」等より際立って自ら決定する機会が少ないとしている。本研究で「医療行為」とともに、有意な差の見られた「生活の場の決定」「契約する携帯電話」といった選択行為は木口(2014)によれば契約行為とされており、契約行為は今回対象となった知的障害者にとって、決定権が保障されていない、もしくは決定していても決定に対する実感を抱いていないことが明らかとなった。

研究 2: 知的障害者の自己決定に関わる学習プログラムの作成

特別支援学校教員 4 名とともに検討した。研究 1 の結果を踏まえると、「生活する場の決定」などの契約行為に関する自己決定機会も少ないものの、外食のメニューの決定に関しても、対象者全員が、選択機会が「ある」と回答したわけではなかった。よって、学習講座の題材については、知的障害者にとって身近な題材を扱うこととし、地理講座では「お茶の種類」、日常生活講

座では「お昼ご飯の選択」となった。今枝ら(2020)はこれまで提言されて自己決定プロセス等および知的障害者の学習特性を踏まえ、「知的障害者の自己決定の選択プロセス」を提案し、自己決定に含まれる選択行為には選択肢の理解が必要であるとしている。選択肢を構成する複数の条件の組み合わせを理解することが選択肢理解につながると言えるが、こうした行為は論理的操作を伴い(辰野,1970)、多くの知的障害者にとって、遂行困難が予想される。そのため、学習講座で選択肢(対象物)の特徴を理解する活動において、知的障害者は言語性ワーキングメモリより視空間性ワーキングメモリの方が得意である(Carretti,Belacchi & Cornoldi,2010)という学習特性を踏まえ、選択肢の特徴の視覚化といった支援が必要であると考えた。

研究3：知的障害者の自己決定に関わる学習プログラムの有効性の検証

1．オンデマンド型動画の検証

共通質問項目は10名の回答があり、スマートフォンで再生したのが9名、パソコンが1名であった。一人で再生したのは7名、家族と一緒に再生したのは3名であった。対面講座の受講希望は5名、動画による講座の受講希望は2名、どちらも受講したいは2名であった。動画1の質問項目について、内容が簡単と回答したのは5名、どちらでもない3名、難しい2名であった。動画の時間が長く、説明スピードが速いと回答したのは1名で、内容が難しいと回答した者だった。動画2の質問項目について、内容が簡単と回答したのは5名、どちらでもない1名、難しい1名であった。要素の抽出、要素の整理については、全員わかりやすかったと回答したものの、動画の時間が長く、説明スピードが速いと回答したのは4名であった。

1．学習講座

(1) 地理講座

「要素の抽出」「要素の整理」「観点の命名」といった対象物の特徴を捉えるプロセスの達成状況について、「要素の抽出」は最後に取組んだ「白茶」の達成率が低かった。「要素の整理」等は「達成」が6割以上であり、答えの提示を必要とする対象者がいた。次には、「白茶」は8割が、「紅茶」は6割が達成した。

「要素の抽出」で反復学習の効果を期待した「白茶」の達成率が低かったことや、「観点の命名」で答えの提示を必要とした対象者がいたことなどは、「まとめシート」の用語の選定が曖昧であったことが影響したと考えられる。対象物の図式化は、構成図の重なり(複数条件の理解)を意識できるように2要素から成る構成図を作成した。反復学習による効果を期待したが、「重なり」に該当しない「白茶」よりも、「重なり」に該当する「紅茶」の達成率が低かったことから、「重なり」を意識することが難しい対象者がいると考えられる。手立てや展開のさらなる改善が必要である。

(2) 日常生活講座

展開2-2のメニューの条件の理解の達成率について、達成が「なべ焼きうどん」以外、8割を超えていた。また、多くのメニューで、条件を限定して示すと、9割以上の対象者がメニューの条件を理解していた。展開3の選択理由の説明は、「達成」が62.5%、「ヒント・モデル提示」が15.6%、「一対一援助」が18.8%、「答えの提示」は3.1%であった。

展開2-2では、展開2-1で演習的に取組んでいたことで、集合の図を用いた選択肢の把握ができるようになっていた。また、展開3の選択理由の記述は、6割の受講者が達成していた。ヒント・モデル提示を合わせると8割近くの受講者が説明することができていた。記載内容を詳しく見てみると、提示したタイプを特徴づける言葉を使っている受講生もいれば、自分の好みで選んだといった記載もあった。残り時間・残金との関係でメニューの価値づけを行ったが、価値づけの理解には受講生ごとでバラつきが見られた。個人の価値観ではあるが、より条件等を踏まえた上で、価値づけができるようなツールや手だてが必要になってくることが示唆された。

今後の課題

今後の課題は2点である。

1点目は作成した自己決定に関わる学習プログラムを知的障害特別支援学校高等部で実施していくことである。本研究は当初、知的障害部門を持つ特別支援学校高等部に在籍する生徒に対して自己決定に関わる学習プログラムを実施する計画をしていた。しかし、新型コロナウイルス感染症の影響により、特別支援学校を対象とした研究が困難となった。そのため、成人期知的障害者の自己決定の実態を明らかにしたり、成人期知的障害者の生涯学習支援の取組を対象に学習プログラムを実施し、その有効性を検証したりした。作成した学習プログラムは単発であり、今後、「住まいの場の選択」などをさまざまなテーマで講座を作成し、その学習方法を検討していく必要があると言える。作成した講座は、今後学齢期で取組んでいく必要がある。

2点目は、学習プログラムを通して、自己決定に関わる能力、特に問題解決能力が形成されるか検証することである。本研究では成人期知的障害者の生涯学習支援の取組という限られた機会を実施したため、課題の達成率から支援方法を提案したものの、その後、知的障害者が自己決定に関わる能力を形成したかどうか検証することはできなかった。学齢期で実施する上では、実態把握の方法、どの授業で行うか、単元構成、などを検討し、学習支援システムを構築していく必要があると言える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 今枝史雄	4. 巻 71
2. 論文標題 知的障害特別支援学校高等部における教科・領域に基づく教育課程編成に関する今後の課題-2009年告示学習指導要領実施下の調査を通して-	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 大阪教育大学紀要. 総合教育科学	6. 最初と最後の頁 365-376
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今枝史雄	4. 巻 41
2. 論文標題 知的障害者の問題解決能力形成に向けた教科別の指導について：成人期の理科の取り組みを通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 精神科	6. 最初と最後の頁 146-154
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 今枝史雄, 佐藤麗奈, 菅野敦	4. 巻 69
2. 論文標題 知的障害特別支援学校の教育課程編成に関する今後の課題 - 指導形態ごとの実施率と年間授業時間数の分析を通して -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大阪教育大学 総合教育科学	6. 最初と最後の頁 49 - 62
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 今枝史雄, 菅野敦, 城田和晃, 辻村洋平, 川西邦子, 佐藤麗奈, 棟方哲弥
2. 発表標題 知的障害者のオンデマンド型オンライン学習における指導・支援方法について
3. 学会等名 日本特殊教育学会第61回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 今枝史雄, 佐藤麗奈, 烏雲畢力格, 菅野敦
2. 発表標題 知的障害特別支援学校における学習指導要領に応じた教育課程編成上の課題について 小学部から高等部の分析を通して
3. 学会等名 日本特殊教育学会第59回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 佐藤麗奈, 今枝史雄, 烏雲畢力格, 菅野敦
2. 発表標題 知的障害特別支援学校小学部における教育課程編成上の課題について 3群での比較を通して
3. 学会等名 日本特殊教育学会第59回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 城田和晃, 今枝史雄, 菅野敦
2. 発表標題 知的障害者の思考力・判断力・表現力を形成する「教科別の指導」の指導方法について() 理科の実践での達成率の経年変化を通して
3. 学会等名 日本特殊教育学会第59回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 吉澤洋人, 川西邦子, 今枝史雄, 菅野敦
2. 発表標題 知的障害者の思考力・判断力・表現力を形成する「教科別の指導」の指導方法について() 社会の実践での達成率の経年変化を通して
3. 学会等名 日本特殊教育学会第59回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 川西邦子, 吉澤洋人, 今枝史雄, 菅野敦
2. 発表標題 知的障害者のオンデマンド型オンライン学習における指導方法の特徴について 対面型講義との比較を通して
3. 学会等名 日本特殊教育学会第59回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 烏雲畢力格, 今枝史雄, 菅野敦
2. 発表標題 知的障害特別支援学校の指導形態別の課題に関する探索的研究-全国調査を通して-
3. 学会等名 日本発達障害学会第56回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 今枝史雄
2. 発表標題 知的障害児の成人期を見据えた教育課程・教育内容の検討 - 特別支援学校卒業生への調査を通して -
3. 学会等名 日本発達障害学会第56回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 今枝史雄, 菅野敦, 城田和晃, 吉澤洋人, 井澤信三, 水内豊和
2. 発表標題 知的障害者の思考力・判断力・表現力を形成する教科別の指導 - 理科・社会科の実践を通して -
3. 学会等名 日本特殊教育学会第58回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 今枝史雄, 佐藤麗奈, 菅野敦
2. 発表標題 知的障害特別支援学校における 教科・領域を中心とした教育課程の編成(1) - 小学部の分析を通して -
3. 学会等名 日本特殊教育学会第58回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 城田和晃, 佐藤麗奈, 今枝史雄, 菅野敦
2. 発表標題 知的障害者の思考力・判断力・表現力を形成する教科別の指導に関する研究() 成人期の理科の実践を通して
3. 学会等名 日本特殊教育学会第58回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 川西邦子, 吉澤洋人, 今枝史雄, 菅野敦
2. 発表標題 知的障害者の思考力・判断力・表現力を形成する教科別の指導に関する研究() 成人期の社会科の実践を通して
3. 学会等名 日本特殊教育学会第58回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 吉澤洋人, 川西邦子, 今枝史雄, 菅野敦
2. 発表標題 知的障害者の論理的な思考の形成に向けた学習支援 集合分類に関わる課題の実施を通して
3. 学会等名 日本特殊教育学会第58回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 辻村洋平, 竹井卓也, 大沼健司, 今枝史雄, 菅野敦
2. 発表標題 成人期知的障害者の住まいの場の選択に関わる学習支援() 選択に用いる観点を整理する活動を通して
3. 学会等名 日本特殊教育学会第58回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐藤麗奈, 今枝史雄, 菅野敦
2. 発表標題 知的障害特別支援学校における 教科・領域を中心とした教育課程の編成(2) - 中学部の分析を通して -
3. 学会等名 日本発達障害学会第55回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 今枝史雄, 佐藤麗奈, 菅野敦
2. 発表標題 知的障害特別支援学校における 教科・領域を中心とした教育課程の編成(3) - 高等部の分析を通して -
3. 学会等名 日本発達障害学会第55回大会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

Habi-Labo オープンカレッジ東京 https://habi-labo.org/oct/

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------